清流通信
Shimantogawa Monogatari
四万十川物語
第 180 章 通信日 ● 2011年 10月 25日

〈送信者〉
財団法人 四万十川財団
TEL：0880-29-0200
FAX：0880-29-0201
E-mail: office@shimanto.or.jp
URL:http://www.shimanto.or.jp

町を元気にする活動に取り組んで！ =NPO 四万十 ART=

清流通信読者の皆様こんにちは。
今回は四万十町から、地域を元気にする活動に取り組む“NPO 四万十 ART”の林三千子さんについてお伝えします。

JR 予土線 観光ガイド付きトロッコ列車

2 両編成の小さな列車は、山あいを縫うように、四万十川の流れにシンクロするかのように、ゆっくりと、ゆっくりと、川に沿って進んでいく。ここは四万十川中流域。予土線（よどせん）は、高知県四万十町の若井駅から愛媛県宇和島市の北宇和島駅に至る、総延長 76,3km の JR 四国の鉄道路線だ。列車は四万十町窪川駅を出ると、四万十市江川崎駅までの区間、四万十川沿いをずっと走る。 時折入るトンネル以外では、右に左に時々位置を変えながらも、四万十川がずっと旅のお伴をしてくれる。 車窓はあたかも映画のスクリーンのごとくで、この季節の四万十川は、赤や黄色に染まった秋色の山々を背景に、息をのむほど美しく、そして穏やかに流れている。

この予土線では、春から秋にかけての期間“トロッコ列車”が走っている。現在では全国的に見られるトロッコ列車だが、実は、“元祖トロッコ列車”は、1984 年に、ここ予土線が無蓋貨車（トラ 45000 形）に屋根と座席を付けた“トロッコ清流しまんと号”を走らせたのが始まりといわれている。 車体上部が無いこの列車、肌で外の空気を感じながら、四万十川流域の景観を楽しむことが出来る。時々現れる沈下橋、手を伸ばした先に清らかな水の感触が伝わってくるほど近くに見える四万十川、農作業や川漁をする人々の姿が、穏やかな時間の流れを感じさせる。

今年、この予土線では、地元の女性グループ“NPO 四万十 ART”の“観光ガイド付きトロッコ列車”が、11 月末までの土日祝日に運行している。2009 年に国の重要文化的景観に選定されたこの地域、車窓から見える風景だけではなく、四万十川に架かる沈下橋や流域の歴史などにも触れながら、時折、方言を交えての案内は評判で、40 席しかないトロッコ列車は、いつもお客さんでいっぱいになるという。

地域を元気にしたい！ NPO 四万十 ART

NPO 四万十 ART 代表の林三千子さんが、生まれ育った町、四万十町大正を離れたのは、今から 40 年ほど前。
「その頃の“大正”は、“国鉄”予土線の窪川～江川崎間が開通した頃で、賑やかなとっても活気ある町でした。」
人も自然もとても元気だったと、林さんは懐かしそうに話してくれた。
「ところが 40 年後、ここに戻ってみれば、開いた店はほとんど無くて、夜になると町中ひっそり静まりかえり、まっ暗闇になってしまう。あの頃の面影はどこにもなく、ふる里が変わり果てたことは、本当にショックでした。」

いつも心の中にあった“ふる里の原風景”が、ただの“寂れた田舎町”に変わってしまっていた。林さんは、言いしれぬ寂しさを覚えたという。

「どうして良いかはわからないけど、こんなんではいけないと、自分のふる里を少しでも活気づけるため、みんなが元気になれるような企画をしなければと、その時は、そう思うばかりでした。」

そんな時、その頃所属していた地域の女性グループの勉強会で、高知県東部で開催されている“ひなまつり”のことを知った。ひなまつりを企画することで、地域が、人々が、元気になっていったということを聞かされた。

自分がやらねばならないのはこういうことだ、そう思った林さんは、
「私、負けず嫌いやけん、その時『自分達のところでもできるわ！』と言い切ってしもた。」　言ったからにはやるしかない。

こうして、林さん達の“町を元気にする活動”が、手探りながら始まった。

“四万十街道ひなまつり”と これからの活動と

平成 19 年から始まった“四万十街道ひなまつり”は、現在、四万十川の上流域から下流域まで、５市町にまたがる広範囲を会場として開催されている。

「1 年目はホンの数カ所の展示で始まりましたが、目標は、四万十川源流から、太平洋に注ぐ四万十市下田まで“雛を流すこと”なんです。残る最河口域の四万十市下田までを一緒に連携してできると、四万十川が“ひなまつり”でつながる。それが当初からの夢で、“不入山の一滴の水を下田まで流す”ということです。」

＊流し雛･･･雛人形の歴史は、災厄を祓うために人形(ひとがた)を身代にして川や海に流す習慣から始まったと言われています。

NPO 四万十 ART が取り組む年間イベントは、この“四万十街道ひなまつり”以外にもたくさんあり、１月カルタ大会、2～3 月ひなまつり、５月端午の節句、７月七夕、９月お月見、11 月菊の花、年末に、管理を任されている郷土資料館に門松を出して、１年を終える。だから、代表を務める林さんは、年中忙しい。

「私はね、自分のふる里はなんと素晴らしいところかと思いますよ。自分自身、四万十川のガイドをしながら、“なんとキレイな川だ！”と、見惚れてしまうこともあるの。こんな“えいところ”があるのに、誰も知らんやなんて残念やからね。これを私一人の宝物にしておくのはもったいない、みんなに知ってもらいたい。四万十川をもっともっと PR したい。だから少しくらい忙しくても、平気なのよ。」

この 11 月６日の日曜日には、高知市のはりまや橋商店街で、今年で３回目となる、四万十川流域の文化的景観の紹介とそのパネル展 及び 四万十川流域物産展の“まるごと四万十 in はりまや橋”が開催される。「そこでは、四万十町からはアユの炭火焼き、“志和のこんぶ祭”で有名なエビ汁を出す予定です。」

そう言いながら、楽しそうに笑う林さんの目下の夢は二つある。
「一つはね、“四万十街道ひなまつり”を四万十市下田まで巻き込んで、四万十川を“ひなまつり”でつなぐこと。もう一つ、私はね、“四万十町”を売り出したいがよ。もっと明るいイメージにしたい。そうすれば、ここに人がもっともっと、訪れると思うの。」
二つの夢が叶ったときには？
「そのときは、引退するわ」と言いつつ、林さんはにっこり笑った。
けれどもその先には、きっとまた、新しい夢がうまれているのに違いない、
なぜなら、林さんにとって、夢は、追い続けるためにあるのだろうから・・・
その笑顔を見つめながら、私は、そう思わずにはいられなかった。

“四万十街道ひなまつり”で展示された古いお雛様